

民俗的計画学から見たコミュニケーション発生の場

森栗 茂一[†]

[†]大阪大学コミュニケーションデザイン・センター 〒560-0043 大阪府豊中市待兼山 1-16

E-mail: [†] morikuri@cscd.osaka-u.ac.jp

あらまし 土木計画学(交通・都市計画学)におけるコミュニケーションを、教育学的に、民俗学的に考察した。
キーワード 土木計画学、歩き、お遍路、ワークショップ、

Communication chances of urban planning at platform for discussion

Shigekazu MORIKURI[†]

[†] The Osaka University Center for the Study of Communication-Design

(1-16 Machikaneyama-cho, Toyonaka, Osaka 560-0043, JAPAN)

E-mail: [†] morikuri@cscd.osaka-u.ac.jp

Abstract Communication chances of collaboration in civil engineering will be happen at platform of community

.In this case, it is most important to find our consent in human communication.

Pedestrian is one of most important way. Because it will make any chances in human communication.

O-henro is most famous pilgrimage of pedestrian:1200km in Japan.

There are many communication chances in O-henro. this communication system is called O-settai.

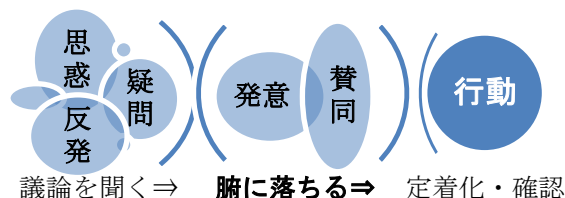
Keyword civil engineering, pedestrian, pilgrimage, workshop,

1. 土木計画での話し合い学

協働のまちづくり、合意形成の現場では、個々人の利害や思惑によって事業計画がすすまないと思われる。しかし、実際は、ちょっとしたコミュニケーション不足から、思惑と疑問が膨らみ、予想外の反発で混乱し、事業停滞、ときには、「口もきかない」「挨拶もしない」といった、とりかえしのつかない長期間コミュニケーションレスをコミュニティにおこしてしまうことも少なくはない。

行政やコンサルタントは、膨大なデータや数字をもって、ときには法的威嚇も含め、説得しようとするが、すればするほど誤解が拡がることも少なくない。むしろ、多様な議論をする場を設け(プラットフォーム)、じっくりと聞きあうことが大切である。そうした、長い議論のなかで、相互に納得する瞬間が生まれる。いわゆるガス抜きではなく、議論し聞きあうなかで、相互の思いが納得できると、「腑に落ちる」点がみいだされる。そのなかで、土木計画、都市計画、交通計画の発意や協働が生まれてくる。

それを確認し、定着させ、具体的な行動に結びつけていくことが重要である。合意や修正変更がなされても、それ以上に、住民がそれを見守り、専門家とともに、よりよき地域づくりのために、行動することが求められている。



これを住民協働型まちづくり [1] と言い、その効果的な話し合いの方法を、土木計画学では「はなしあい学」と呼んで、共同研究をすすめている。

もとより、村の公事(くじ)において、納得するまでとことん議論する手法は、民俗社会にはあった。

旅する巨人、宮本常一が、対馬の村で古文書を借りたいと申し出ると、村の住民が集まり議論したという。情報交換やとりとめもない世間話を3日間、じっくりやって、話も尽きた頃、村長が、「この人は悪い人でもなさそうじゃ。古文書を貸しても良いか」と呼びかけると、皆が口々に「よう、ござんす」となる。こうした、公開のじっくりし議論を、ダンゴウと呼ぶ。

後に、非公開・非競争で不公正・不明朗に、公共工事に伴う非効率な公金支出を行うことを、「談合」と表現されるが、本来は、とことん公開で話し合う、コミュニケーションの民俗システムであったのである。

2. 教育論としての納得

行動的学習観（刺激反応）	認知主義的学習観（知識構成）	社会構成主義学習観（納得解）
できる	わかる	わかちあう
ex.九九	ex.思考力	ex.ワークショップ
正しいこと(説得)は伝わらん	おもろいことはひろがる	腑に落ちたことは動きになる
獲得量を試験	獲得質を試験	経験した質を見る
アンケート数値	自由回答分析	ワークショップ ^o などグループワーク経験

一般的には、知識やデータの量があれば、理解（学習）がすすめと考える傾向にある。アンケートをして数値を積み重ねれば、説得できると考える。しかし、この正しそうな議論が、コミュニケーションレスを生み、説明すればするほど、誤解が広がることも多い。

行政マンやコンサルタントは、土木計画の現場で、「正しいことは伝わらない」という換言を思い起こさねばならない。むしろ、アンケートの自由回答に、住民の生の声を発見して、計画を推進することがある。知識やデータの質、面白さこそが、コミュニケーションの第一歩である。

しかし、そのコミュニケーションはマスとして捉えることが難しい。個別意見だけでは、計画実行には展開できない。

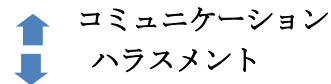
そこで、理解をわかちあう、聴きあうワークショップなどが有効となるのである。これは経験の質、態度の変容を求めているのであるが、ともすれば、住民の「腑に落ちる」理解よりも、ワークショップの回数や、合意形成の成果のみ求める、「アライワークショップ」も少なくない。また、どのような色のプロッキーを使うとか、どのようなファシリテーショングラフィクス(聞いたこと次々板書する手法)が良いかなど、ワークショップの技術論に終始し、コミュニケーションの質、第度変容のプロセスに議論が及ばないこともある。評価手法も不明確である。

3. 歩くことの意味

3.1 パーソナルバリアと歩き

個人にはパーソナルバリアがある。通常、両手を広げた直径 1.8m である。これを越えて侵入されると、個人と個人の関係は、緊張した局面にたちいる。一方的にコミュニケーションのないまま立ち入ると、これはハラスメントになる。しかし、コミュニケーションはこの限界線で発生する。3m 離れて議論してもコミュニケーションはできない。逆に、ワークショップで 1m の距離で見つめられても、議論はできない。

限界線は決まっているのではなく、状況に応じて、1.5m のときもあれば、2m のときもある。座った状態のときもあれば、立ち上がったときもある。ワークショップで、思わず立ち上がる瞬間は、コミュニケーション



の相発タイミングなのである。では、ワークショップ以外では、どのような場合に、コミュニケーションが発生するのであろうか。

コミュニケーションは人と人との関係であるから、身体感覚が重要である。会議室ではなく、現場での議論もその一つであらう。

一方で、特定の間ではなく、偶発的な出会い：場を現出させる、歩きも重要である。歩く巨人といわれた、民俗学者宮本常一はその学問の手法を「あるく、みる、きく」と表現した。日本の風景と情景を描いた映画「男はつらいよ」の主人公・寅さんは旅の途上で多様な出会いを得ていることは、言うまでもない。

3.2 お遍路とコミュニケーション

歩きによる出会いという意味では、四国遍路（お遍路）のお接待がある。通常の巡礼は聖堂を目指す、聖堂を巡るのが普通である。日本の四国八十八ヶ所巡礼は、88 の札所を巡るだけではなく、1200 km の遍路路での「お接待」というコミュニケーションにその特色がある。巡礼する人に、物品や宿を与えるのみならず、声をかけ、微笑みをなげかけるのである。

これは、仏教の無罪七施（目施、和顔施、言辞施、身施、心施、床座施、房舎施）にもとづくものであるが、四国の信仰的風土のなかでの、この一瞬の出会いによるコミュニケーションに感動する人は少なくない。

コミュニケーションは、設計、接待されるというよりは、偶発的に発生し、その偶発を誘導する文化システムとしてのお遍路は有効である。

4. 歩きを含んだ土木計画

歩くことは、偶発機会創出のもっとも重要な手法であり、土木計画においては、課題現場、暮らしの現場を、多様な立場のステークホルダーが歩くことで議論することが大切だ。そうした、コミュニケーション機会を設ける土木計画が、今、求められている。

文献

[1] “コミュニティ交通のつくりかた”, 森栗茂一編者, 学芸出版社, 京都, 2013.